道綽『安楽集』第三大門第一に関する覚書
――「起心立徳　修諸行業」という「自力」――

宮井 里佳（人間社会学部情報社会学科）

概要：中国唐代・道綽の『安楽集』第三大門の第一を取り上げ、道綽が依拠した曇鸞『論註』にはない「起心立徳　修諸行業」を中心に検討し、道綽の浄土実践における「自力」について改めて考察する。道綽の易行には「自力」行も含まれている可能性および自力から他力への実践の連続性を指摘する。

１．はじめに

本稿では、道綽『安楽集』第三大門の第一を取り上げ、道綽が依拠した曇鸞『論註』のにはない「起心立徳　修諸行業」という語句について考察する。

この語句については、古くより議論が行われており、今さら論ずるまでもないように思われるかもしれないが、道綽の浄土実践における「自力」行について改めて確認しておきたいと考えるからである。

なお、本問題は、2019 年度より科学研究費補助金研究「中国唐代・道綽浄土思想の基礎的研究」（研究代表者：Michael Conway）において道綽の『安楽集』の訳注事業に取り組む中で浮かび上がってきた問題のほんの一端である。私はかつて『安楽集』の現代語訳（抄）および解説を刊行した[宮井 1995]。当時初めて現代語訳を提示[1]して『安楽集』の全体像を示したものと自負するが、その際には個人的に校勘テキストを作成し、さまざまな問題について考察したにもかかわらず、それらは紙幅の関係もあってきわめて簡潔な解説として提示したにとどまり、詳細な考察として形に残さなかった。また解決できないままになった問題も少なくない。そこで、このたび訳注作業に参加する中で、考察したこと、議論したこと（のいくつか）を何らかの形に残したいと考え、その一つの試みとして、今回覚書としてものすることとした。ただし、今回取り上げる問題については、訳注研究会に参加したメンバーの中でも見解がさまざまであり、本稿は宮井個人の見解である。

２．『安楽集』第三大門の第一の一

道綽（562-645）の『安楽集』は十二の大門（章）から成る。第三大門[2]は四節から成り、第一（節）は「弁難行道易行道」（難行道・易行道を弁別する）である（『大正蔵』47 巻中下段）。

---

[1] 現在では、齊藤隆信・曽和義宏・加藤弘孝・永田真隆・小川法道による訳注（『佛教大学法然仏教学研究センター紀要』第 4 号（2018）～第 7 号（2021）、高橋弘次編著・粂原恒久編集『傍訳浄土信仰系譜体系［四］　安楽集』㈠㈡（四季社 2012）の全訳がある。

[2] [宮井 1995]では、十二の大門すべてに仮題を付している。第三大門は「浄土往生の実践」と題した（p372）。

２－１．　この第一では、難行道・易行道という二種の道について説明される。まず、『法華経』譬喩品の三乗（さとりにいたる三種の方法：声聞乗・縁覚乗・菩薩乗）を三車（羊車・鹿車・牛車）にたとえる説と考えられるものを用いて説明される。すなわち、羊車（声聞乗）・鹿車（縁覚乗）は「権（かり）の息（いこい）のとき（安息の場所）」であって〔さとりには〕「未だ達(いた)らず」という境地である [3]、と。〔だから〕仏は、〔声聞乗や縁覚乗に執着するという〕[4]邪執が菩提の障(さまた)げとなると訶(しか)って導かれたのである。たとえ後に〔声聞乗・縁覚乗から菩薩乗へと〕転じたとしても、それ（＝声聞乗や縁覚乗）は迂回である [5]、〔一方〕ただちに大〔白牛〕車（仏乗）に乗る途(みち)もある、と。

２－２．　道綽は、先に自分が煩悩に苦しめられる迷いの世界（火界）に居るとして怖れを懐いていると言い [6]、この三車の説の末文で一段の最後にもやはり恐れを表明する。「只恐現居退位、嶮徑遙長、自徳未立、難可昇進」と。すなわち、まだ退位に居り（つまり、不退転の位には達しておらず）、〔さとりへの〕嶮しい道は遥かに長い、と。

つづく「自徳未立、難可昇進」の解釈は少々難しい。「自らの徳 未だ立たず」、「自らの徳は未だ立たず、昇り進むことは難しい」とひとまず言えよう。

ここで、「徳」とは何か、が問題となる。本稿の主題である「起心立徳」を理解することに通じる。「徳」と言うと、中国伝統の儒教的徳目を思い浮かべるが、少なくとも道綽当時頃には仏教者としての徳目も意味するようである [7]。「立徳」することは行道と並列にのべられ（彦琮撰『唐護法沙門法琳別傳巻』中：「行道立徳可以播身」『大正蔵』50 巻 206 頁上段）、それは成仏につながる（竺法護訳『大寶積經』巻一一七「今我立徳成佛道」『大正蔵』31 巻 671 頁上段）。そしておそらく「立徳」した者として、「大徳」という呼称がある。「大徳」は、「婆檀陀」（bhadanta 長老・仏・菩薩・高徳の僧等に対する敬称）と説明され（伝龍樹撰・鳩摩羅什訳『大智度論』巻三）[8]、「大徳舎利弗」[9]、「大徳聲聞衆」[10] と

---

[3] 原文「且羊鹿之運、權息未達」。訳注研究会では、「且」をどう読むかについて意見が分かれ、大勢は「そもそも」の意でとるべきだと考えたが、決着をみていない。[齊藤他 2020]には訳語に相当するものなし。

つづく句についても、「羊車（声聞乗）・鹿車（縁覚乗）ですら、權息に到達できていない」と解する可能性も出された。

[4] 「邪執」の内容をこのように取ることは宮井の独断である。[齊藤他 2020]では「邪執」を「声聞縁覚の教え」と解釈している（p2）。

[5] 原文「縱後迴向、仍名迂迴」。ここも訳注研究会で議論になった箇所である。すなわち「迴（廻）向」は仏教語であり、「功徳を他にふりむける」意でとらえなくて良いだろうか、と。[齊藤他 2020]では「転向」と訳しており、本文で示した解釈と同じである。

[6] 原文「余既自居火界、實想懷怖」。

[7] 「徳」については、訳注研究会において大内文雄先生が丁寧に調査すべきだと強くご指導くださった。そこで訳注研究会時にも少し検討したがその折には成果は得られず、本稿では宮井が調査した見解を述べる。ただし当面の調査であって、歴史的変遷などはまたの機会に譲りたい。

[8] 「復名婆檀陀、秦言大徳」（『大正蔵』25 巻 73 頁中段）。

[9] 伝龍樹撰・鳩摩羅什訳『大智度論』巻三（『大正蔵』25 巻 71 頁上段）他。

[10] 龍樹撰・鳩摩羅什訳『十住毘婆沙論』巻五（『大正蔵』26 巻 42 頁中段）他。

いった表現が散見される。つまり、「徳」とは仏道修行のうちに備わってくるものであり、「立徳」した者は高徳の僧、あるいは仏・菩薩とみなされるのである。

では、何/どこに「昇進」するのか。「徳を立てた」結果として三つの可能性が考えられるだろう。すなわち、一にはさとり（[齊藤他 2020][高橋・粂原恒 2012]）、言い換えれば仏、不退転の位である。二には修行の位（[宮井 1995]）である。ただし修行階梯の究極は仏位なので一と大きく異なる見解であるわけではない。三には、高徳の僧である[11]。

道綽は、この欲望の世界では「立徳」してさとりの道を進んでいくことは難しいとし、「是の故に龍樹菩薩云わく」といわゆる難易二道判を述べる。

２－３．　次の「龍樹菩薩云わく」の引文は、つとに知られているとおり、曇鸞の『論註』の冒頭である。まず曇鸞の『論註』を引用する。

> 謹案龍樹菩薩十住毘婆沙云、菩薩求阿毘跋致、有二種道。一者難行道。二者易行道。難行道者、謂於五濁之世於無佛時、求阿毘跋致爲難。此難乃有多途。粗言五三以示義意。一者外道相善、亂菩薩法。二者聲聞自利、障大慈悲。三者無顧惡人、破他勝德。四者顛倒善果、能壞梵行。五者唯是自力無他力持。如斯等事、觸目皆是。譬如陸路歩行則苦。
>
> 易行道者、謂但以信佛因縁、願生淨土、乗佛願力、便得往生彼清淨土。佛力住持、即入大乗正定之聚。正定即是阿毘跋致。譬如水路乗船則樂。[12]

次に上記を引用した道綽の『安楽集』を引用する。

> 求阿毘跋致、有二種道。一者難行道、二者易行道。
>
> 言難行道者、謂在五濁之世、於無佛時、求阿毘跋致爲難。此難乃有多途。略述有五。何者。一者、外道相善、亂菩薩法。二者、聲聞自利、障大慈悲。三者、無顧惡人、破他勝德。四者、所有人天顛倒善果、壞人梵行。五者、唯有自力、無他力持。如斯等事、觸目皆是。譬如陸路前行則苦。故曰難行道。
>
> 言易行道者、謂、以信佛因縁、願生淨土、起心立德、修諸行業、佛願力故、即便往生。以佛力住持、即入大乗正定聚。正定聚者、即是阿毘跋致不退位也。譬如水路、乗船則樂。故名易行道也。[13]

---

[11] 訳注研究会中の大内文雄先生のご教示によれば、戒律を守るという僧侶として当然の徳を具えた戒徳の僧、徳が高い僧、高僧ということである。

[12] 『大正蔵』40 巻 826 頁上中段。

[13] 訳注研究会の福井順忍氏作成のレジュメによる。なお『大正蔵』47 巻 12 頁中段に相当する。

訳注研究会では、輪番担当者が諸本を交換して翻刻・釈文（案）を作成し、研究会中に問題のある箇所を確認校勘し、修正稿を作成している。底本・校勘諸本は以下のとおり（レジュメより転記）:【校勘】は、『大正蔵』第四十七巻収録の『安楽集』を参照した上で、以下の著述を対校する。ただし本稿では煩瑣であるため詳細な校勘記は省略した。

《上下巻》

・天永三年（一一一二）高野山宝寿院蔵本『安楽集』影印本　→　宝寿
・崎陽所刻龍谷大学蔵本　→　崎陽
・宮内庁所蔵 寛元三年（一二四五）刊記　→　宮内

ここで、道綽が曇鸞の『論註』にはなかった□部「起心立徳、修諸行業」の文句を追加したことが明らかである。これは古来問題視されていた箇所であり、山本仏骨氏[山本1939]は、江戸時代よりの研究動向を次のようにまとめている（p270）[14]。

> 尚茲で易行道の下に「「起心立徳修諸行業」と云い『論註』に無かつた文字が挿入されて居る事に就いて、先哲に種々の解釈が行われて居る。或は文の錯簡ではあるまいかと推測した説もあるが、異本の校異を見るに、別なものを見ないから、現在のところ錯簡説も当を得たものではない。本派学系では敬恩の『唯浄記』五に真仮両意を含むとし、高倉学系では、慧然の『勧信義』慧林の『日纂』秀存の『癸丑記』に要弘奄含の釈と見て居る。更に知空の『鑰門』僧樸の『講録』僧鎔の『里皷』鮮妙の『要解』等に何れも「信佛因縁願生浄土」の註であつて『易行品』の「人能念是佛、無量力功徳」と云うものと同意であり一念仏中の五然（ママ 念カ）門の徳を含ましめたのだと云っている。自分は大体後説に随いたいと思うが、これは道綽の行業論と相俟つて更に明らかにせねばならない問題であるから、詳しくは後の行業論に至つて更に論究する筈である。

この後、山本氏は難易二道、聖浄二門判の議論を展開する。まず、このたび現存するでき得る限りの版本を校勘しているので、文字の錯誤ということは、山本氏も言うように、否定できる。次に、「要弘奄含」および「五念門の徳」を「一念仏中」に含ませるという両者とも、それぞれ解釈にちがいはあれど、「修諸行業」を究極的には念仏や一行に帰して考えようとする方向性があるのではないかと考える。

この山本氏の整理は、後の研究にも大きく影響を与えと思われ、たとえば最近でも「道綽は『諸行』を易行道に入れることによって、難易二行道を比較する焦点を完全に行法から自他二力に移した」といった論を見ることができる[王振賢 2021][15]。

さらに、江戸時代の浄土宗系の註釈である良忠『安楽集私記』巻下には次のようにある。

> 「在此起心立行等」とは、間穢土の難行を名づけて自力と為し、浄土往生を他力と為す。然るに今何が故ぞ浄土門に就いて二力を論ずるや。答、義に随って転用なり。[16]

良忠も難易二道、聖浄二門判の流れでとらえているが、注目すべきは、後述するように、

・七祖御釈寛元三年（一二四五）江戸期後刷本　→　七祖
・龍大所蔵室町時代刊記　→　室町
・万治二年（一六五九）刊記　→　万治
・義山校訂の別刷り　→　義山
・七寺一切経所収『安楽集』　→　七寺
・頭評註『安楽集』　→　頭註
・空慧所持鎌倉期刊本　→　空慧？
《上巻》
・建久八年（一一九七）鎌倉時代大谷大学所蔵本　→　建久

[14] 引用文は旧字/正字を通行字に改めた。

[15] 抄録から引用。ただし、本文には「あらゆる行法を修行して願力によって往生できると説くのである。つまり、易行道の行法は阿弥陀仏の名号を称えるだけではなく、いかなる行法でも往生できると拡大解釈している」（p50）とも述べている。

[16] 『浄土宗全書』第一巻、山喜房佛書林、1972 年　p736。ただし、通行字体に改め、訓点にしたがって書き下し文に改めた。

「間穢土の難行を名づけて自力と為し、浄土往生を他力と為す」の記述である。

２－４．　では、道綽が追加した「起心立徳、修諸行業」について改めて考察しよう。「起心」とは発心すること、「立徳」とは、２－２．で論じたように、仏道修行して高徳の僧あるいは仏をめざすことであった。波線部を訳せば、次のようになる。ここでは、訳注研究会の統一見解を離れて、一つの解釈可能性を示すため、かなり踏み込んだ訳を示す。

> 易行道とは、このようなことである。仏を信じるという因縁によって、浄土に生まれたいと願って、発心して立徳し（つまりさとりをめざして仏道修行し）、諸もろの実践をする。仏の（人々を救いたいという）願いの力によって、すぐに（浄土に）往生する。この仏の願いの力が（浄土に往生した人々に対しても）はたらきつづけることによって、（浄土に往生した人々は）すぐに大乗正定聚の位という、阿毘跋致と呼ばれる不退転の境地に至る[17]。

まず、くりかえしになるが、「起心立徳、修諸行業」というのは、この穢土における、菩薩、僧侶たちの実践である。当時の中国仏教一般の戒律を守ってさとりをめざしての実践と考えて差し支えないであろう。しかしここでは、〔阿弥陀〕仏を信じて浄土に生まれたいと願って、修行するのである。そのような人々は、阿弥陀仏の本願の力によって往生することができるという。この穢土において修行しても、この段の引用の前に道綽自身が嘆いたように（２－２.）、「自徳未立、難可昇進」であるが、つまりなかなかさとりを得ることはできないが、阿弥陀仏の力によって浄土往生し、さらに、「大乗正定聚の位という、阿毘跋致と呼ばれる不退転の境地に至る」、すなわちさとりを得ることになるのである。これを、つづく文では、船に乗って水路を行くように楽なので、「易行道」としている。ここで直接的に阿弥陀仏の力による「易行道」とされるのは、浄土に往生して、さとりを得るに至る部分だと考えることができる。それを「他力」とするならば、浄土往生以前の此土における「起心立徳、修諸行業」は、「自力」なのである。これについては、第三大門の第一の二の問答解釈において明確に説明されている。

２－５．　第三大門の第一の二の問答解釈における説明を確認する。

> 在此起心立行、願生淨土、此是自力。臨命終時、阿弥陀如來光臺迎接、遂得往生、即爲他力。[18]

ここでは、「此土で起心し立行し」、すなわち前段の「起心立徳、修諸行業」と同じ内容である、しかし一般的なさとりをめざす実践とは異なり、「浄土に生まれたいと願って」行

---

[17] コンウェイ氏によれば、該当箇所の往生を成就させる「仏願力」と、大乗正定聚に入らせる「仏力」（大願業力）とを区別して考えるのが真宗の伝統的な読み方だそうであるが（あくまでも宮井の理解による）、[齊藤他 2020]や宮井は区別していない。

訳注研究会では、「仏力住持」について、①仏力がこの世間にとどまりたもたれるのか、②仏力が浄土においてもはたらきつづけるのか、③仏力が衆生をたもつのか、について議論が紛糾した。

なお、[齊藤他 2020]では、「住持」のニュアンスは訳文には見られなかった。また、注(2)において、『無量寿経』の第十一願を挙げている。

[18] 注 13 と同様、訳注研究会の福井順忍氏作成のレジュメによる。なお『大正蔵』47 巻 12 頁下段に相当する。

う修行を「自力」としている。一方、「命終の時に臨み、阿弥陀如來が光り輝く臺(うてな)とともに直接にお迎えになられ、〔浄土に〕往生できることが「他力」であるとしている。２－４．で検討した内容と同じである。浄土往生を願って此土において「起心立徳、修諸行業」することは「自力」なのであり、阿弥陀仏の力によって浄土往生できることが「他力」なのである。

有名な喩も確認しておこう。

> 如有劣夫、信己身力、擲驢不上、若從輪王、即便乘空、遊四天下。即輪王威力故名他力[19]。
>
> 力弱くて行を修めることが難しい者が、自らの力を信じて驢馬(ろば)を鞭打ったところで、〔空に〕上(のぼ)れはしないが、もし転輪聖王に従えば、即座に空に昇り、世界のあらゆるところに行くことができるようになる。このように転輪聖王の威神力によるので、他力と名づけられる。

「他力」とは転輪聖王の威神力によって空に昇ることだと言う。不可能なことを可能へと飛躍させる力である。これは、阿弥陀仏の力によって浄土往生し、さとりを得ることに相当するだろう。一方、自分の非力で驢馬を鞭打って空に上ろうとすること、つまり不可能なことに努力しつづけること、修行して浄土に往生しようとすることが「自力」に相当すると考えられる。

３．まとめ

３－１．　『安楽集』第三大門の第一の一を検討し、道綽が追加した「起心立徳、修諸行業」が「自力」行であることを確認した。この箇所においては、此土において浄土往生することを願い、さとりをめざして修行するのと同様に修行する自力の上に、阿弥陀仏の願力がはたらいて、すなわち他力によって浄土往生し、さとりへ到達することが説かれていた。我々は、自力＝難行＝聖道、他力＝易行＝浄土門という二項対立的な図式にひっぱられ、自力→他力という構造を見逃してきたのではないかと考えられる。

３－２．　さて、自力→他力の構造は、実は杉山裕俊氏によって、本稿と論証の仕方は異なるが、すでに論じられていた。該当箇所を引用する。

> このように、道綽は易行道を単に他力他摂の法門と規定しているわけではなく、そこには自力と他力の両面があることを明かしている。すなわち、『安楽集』における易行道とは、現生で菩提心を発し、往生浄土を願いながら仏道修行を実践するおと（自力）と、臨終時に阿弥陀仏の来迎（他力）によって浄土へ往生するという二つの過程を経て成立するものであり、道綽は自力・他力を着い概念としてではなく、一つの連続した関係にあるものと捉えている。([杉山 2014]p56)

近年の論考には、(杉山氏の先行研究のまとめを読んでも) おそらくこうした構造が明確に論じられているものはないと考え、本稿をものすこととしたが、実は２－３．で掲げた

---

[19] 同上。なお、ここも曇鸞の引用である。:『略論安樂淨土義』「又如劣夫、以己身力、擲驢不上、從轉輪王行、便乘虚空、飛騰自然。復可以擲驢之劣夫、言必不能乘空耶。」(『大正蔵』47 巻 2 頁中段)。

ように、江戸時代の良忠『安楽集私記』巻下にはすでに次のように述べられていた。すなわち、「間穢土の難行を名づけて自力と為し、浄土往生を他力と為す」と。私はこの記述を長らくよく理解できずい取り上げることはなかったが、此土は難行であり自力、浄土往生を他力とすると明確に述べられている。ただ、自力→他力という連続構造になっていることがどれだけ意識されていたかは不明である。この『私記』を受けて江戸時代にはさまざまな註釈書がつくられるが、それらにどのように説かれているのか、少しく探求しても良いかもしれない。

本稿は覚書ということで、訳注研究会および私自身が考えた問題と、道綽浄土教における「自力」との両者を記述しようとして雑駁になってしまったことを反省する。また、今後の課題として、『安楽集』の他の章節の記述とあわせて自力と他力と、とりわけ難行道と易行道との関係を改めて考究する必要があると考える。

【参考文献】

王 振賢　2021　道綽『安楽集』における難易二行道に関する再考
『佛教大学大学院紀要　文学研究科篇』第 49 号
齊藤隆信 / 曽和義宏 / 加藤弘孝 / 永田真隆 / 小川法道　2020
「安楽集」訳註（三）　第三大門　『佛教大学法然仏教学研究センター紀要』第 6 号
杉山裕俊　2014　『安楽集』の研究（大正大学平成二十六年度学位請求論文）
高橋弘次編著・粂原恒久編集　2012　『傍訳浄土信仰系譜体系［四］　安楽集』㈜四季社
宮井里佳　1995　「道綽の著作と思想」、藤堂恭俊・牧田諦亮『浄土仏教の思想』第四巻
「曇鸞・道綽」（牧田・直海・宮井共著「道綽」の内第二部）pp.271-397、講談社
山本仏骨　1959　『道綽教学の研究』永田文昌堂

〈キーワード〉道綽　『安楽集』　自力　「起心立徳　修諸行業」

（本研究は、JSPS19K00069 による研究成果の一部である。
『安楽集』訳注研究会の研究代表者 Michael Conway 先生、煩瑣な校勘作業はじめレジュメを作成してくださった福井順忍先生、ご教示くださった大内文雄先生、研究会参加諸氏に感謝の意を表する。）